

9 安定したさとうきび生産技術の確立と持続ある産地の育成

【成果の要約】

- 1 関係機関と連携し、さとうきびの土づくり、かん水の実施、雑草防除の実施など適期管理の呼びかけを通じ、その重要性を認識する生産者が増加した。
- 2 苗の生産体系の実証ほを設置し、年2回採苗体系での生育量を把握した。
- 3 沖永良部島および与論島における大規模農家の省力化事例を聞き取り、例を整理することで、大規模経営体の栽培体系を認識することができた。

1 対象

J Aあまみさとうきび部会 和泊地区 531 戸、知名地区 558 戸、与論地区 601 戸。

2 課題を取り上げた理由

- (1) さとうきび生産は、台風や干ばつ、病虫害の発生等により生産量が不安定な年が多く、単収の高位平準化が課題である。
- (2) 沖永良部島、与論島では高齢化による労働力不足が進んでおり、さとうきび生産者の高齢化率（60 歳以上）は沖永良部島、与論島で約 71% と高い状態にある。一方、機械化による生産規模の拡大が進んでいる。高齢化の一方、機械化が進む現状から、機械化に適応した技術の向上による収量増、省力化をさらに推し進める必要がある。
- (3) 生産安定対策支援を行うとともに、省力化技術の確立を行い、農作業受託組織の育成支援を行う。

3 活動内容と成果

- (1) 生産安定対策支援と省力化技術の確立

ア 適期管理及び土づくりの啓発と実践支援

関係機関・団体と生産技術対策や干ばつ対策、農作業安全対策等について検討し、各種広報等により周知を図った。今年度は、梅雨明け後に強い干ばつが発生したため、特にかん水の適期実施を呼びかけた。また、さとうきびの管理について、土づくりや雑草防除などについて啓発活動を行った。

令和 6/7 年期において、沖永良部地区では、過去 5 年間で最も多い生産量を見込んでおり、与論島では平年並みの収穫面積を見込んでいる。



干ばつにより葉がロール状になった
与論島のさとうきび



かん水実証ほにおけるかん水の様子

イ 規模拡大に対応した栽培体系の確立

(ア) 苗生産体系の検討

ビレットプランタに適する良質な苗生産に向け、6品種（農林8号、22号、23号、27号、30号、はるのおうぎ）を供試した実証ほを設置し、ハーベスタ採苗に適する年2回採苗体系を検討した。生育期間が春から夏になる一回目採苗（9月採苗）は、かん水を実施することで茎数および芽数の確保ができ、採苗として実用の可能性があった。一方、生育期間が秋から冬になる二回目採苗（2月採苗予定）は、気温の低い期間が長いため、茎長の生育量の確保が難しく、かん水を実施しても、採苗用としての苗生産の可能性は低い見込みである。

(イ) 大規模経営体の省力化

和泊町、知名町、与論町の大規模農家から、大規模経営を維持するために行っている省力化作業や、工夫している農作業について聞き取りを行い、取りまとめた。その結果、農家ごとに農作業時間削減や労力を軽減するための工夫が行われていた。例として、不耕起によるさとうきび栽培で作業時間削減、植付本数を増やし初期生育で茎数を確保することで株出し回数を増やす、チューブを用いたかん水を行うことで、かん水装置の設置や撤去が容易になる、などである。

規模農家の作業形態を取りまとめ、今後、大規模化を図る農家の参考資料となる事例集を作成する。



さとうきびハーベスタ
オペレータ研修会での安全研修



年2回採苗体系実証ほ
1回目採苗した苗

4 今後の課題

- (1) 適期管理及び干ばつ時のかん水の啓発と実践支援
関係機関・団体と連携した、研修会等によるかん水対策等の周知の継続
地区平均単収の向上
- (2) 土作りの啓発と実践支援
堆肥入化成肥料を用いた栽培の検討
- (3) 規模拡大に対応した栽培体系の確立
ア ビレットプランタ体系に対応した年2回採苗による苗生産体系の検討

5 担当した普及職員（○印はチーフ）

○松田慶五，満吉俊也